

「日本の在宅医療～未来をデザインする～」

座長 | **太田 秀樹** [全国在宅療養支援診療所連絡会 事務局長 / 医療法人アスムス 理事長 / およま城北クリニック]

略歴

1953年 奈良市生まれ。1979年日本大学医学部卒、日本大学付属板橋病院麻酔科にて研修。自治医科大学大学院修了後、同大整形外科医局長、専任講師を経て、1992年在宅医療を旗印に およま城北クリニック(小山市)開設。

介護老人保健施設、訪問看護ステーション、訪問介護事業などの介護保険サービス事業他に在宅療養支援診療所(生きいき診療所:結城市・蔵の街診療所:栃木)を運営し、機能強

化型在宅療養支援診療所として24時間×365日のサービスを展開し、地域包括ケアシステムの一翼を担う。

医学博士。日本整形外科学会認定専門医。麻酔科標榜医。介護支援専門員。在宅ケアネットワーク・とちぎ代表世話人、日本医師会在宅医療連絡協議会委員、日本在宅医学会理事、全国知事会先進政策頭脳センター委員、厚生省検討会委員。著書・論文多数。

演者

唐澤 剛 厚生労働省 保険局長

横倉 義武 日本医師会 会長

大島 伸一 国立長寿医療研究センター 名誉総長

新田 國夫 全国在宅療養支援診療所連絡会 会長 / 医療法人社団つくし会 新田クリニック

川村 佐和子 日本在宅看護学会 会長

概要

昭和50年ごろまでは、高齢者が量の上で最期を迎えることは、けっして珍しいことではなかった。家族による看病と医師の往診による死亡診断があたりまえに行われていたからであるが、いつのまにか寿命で命を閉じる高齢者までもが病院で濃厚な治療のはて病院で死ぬ文化が醸成されていく。その背景にはさまざまな要因が潜んでいるが、現在4人に1人が高齢者という超高齢社会を迎えた。超高齢社会は換言すると多死社会といえる。そして、出生率の低下は、高齢化により拍車をかけ、やがて3人に1人が高齢者といういかなる国も経験したことがないいびつな社会が待ち受けている。ある推計によると25年後には170万人が死亡し、出生者数はわずか70万人。年間100万人の人口が減少するという。

はたして長寿を喜べる社会が訪れるのであろうか。真の豊かさを享受できる超高齢社会をデザインするのは私たちである。地域包括ケアシステムに象

徴されるように、さまざまな施策が打ち出され、法制度からも牽引されながら、在宅医療への期待は一層高まりつつある。長寿を目指す医療から、天寿を支える医療へとパラダイムは大きくシフトし、医療が介入した妥当性の物差しは、QOLへと変容した。

そこで本シンポジウムでは、日本の在宅医療の歴史を振り返り、現在の在宅医療の現状と課題を浮き彫りにしながら、あるべき在宅医療を具体的に示したい。そして、在宅医療が当たり前の地域医療の形とするには、どうすべきか。その具現化に向けた戦略や知恵が導き出されることを期待している。在宅医療が困難な理由を合理化するのではない。もはや在宅医療の普及推進は国民的な最重要、最優先課題だからである。

そこで、日本医師会、厚生労働省、国立長寿医療研究センター、日本在宅看護学会、全国在宅療養支援診療所連絡会から5名の論客にご登壇いただき熱く討論する。